

新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響 (第1報)～北海道内の大学への調査結果から～

著者	飯田 昭人, 水野 君平, 入江 智也, 西村 貴之, 川崎 直樹, 斉藤 美香
雑誌名	北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
巻	12
ページ	147-158
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.24794/00003284

新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響（第1報） ～北海道内の大学への調査結果から～

Effects of the Spread of the COVID-19 on College Students (Part1)
～ Results from a Survey of Universities in Hokkaido ～

飯田 昭人	水野 君平	入江 智也
Akihiro IIDA	Kunpei MIZUNO	Tomonari IRIE
西村 貴之	川崎 直樹	斉藤 美香
Takayuki NISHIMURA	Naoki KAWASAKI	Mika SAITO

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
第12号 2021

新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響（第1報） ～北海道内の大学への調査結果から～

Effects of the Spread of the COVID-19 on College Students (Part1)

～ Results from a Survey of Universities in Hokkaido ～

飯田 昭 人 ¹⁾	水野 君 平 ²⁾	入江 智 也 ¹⁾
IIDA Akihiro	MIZUNO Kunpei	IRIE Tomonari
西村 貴 之 ³⁾	川崎 直 樹 ⁴⁾	斉藤 美 香 ⁵⁾
NISHIMURA Takayuki	KAWASAKI Naoki	SAITO Mika

要 旨

本研究は、北海道内の大学生909名を対象に2020年7月から9月までの2か月間に実施した質問紙調査の結果から、新型コロナウイルスの感染拡大が大学生にどのように影響を及ぼしているのかについて、経済的困り感や遠隔授業の負担感、精神的健康や不安感、孤独感などの指標により明らかにしたものである。

経済的困り感の認知について新型コロナウイルス発生前後を比較すると、経済的困り群（「経済的に困っている」「経済的にかなり困っている」）が2.7倍増加していることが認められた。

また、遠隔授業の負担感については、オンデマンド授業とライブ授業に分けて尋ねたところ、オンデマンド型授業の負担感については、負担群（「とても負担である」「すこし負担である」）は52.4%、負担ではない群（「まったく負担ではない」「あまり負担ではない」）は32.8%であった。ライブ型授業の負担感については、負担群（「とても負担である」「すこし負担である」）は48.1%、負担ではない群（「まったく負担ではない」「あまり負担ではない」）は32.5%であった。

心理尺度においては、Kessler 6 scale (K6) からは、対象学生の約55%の学生がストレスを抱え、そのうち約17%の学生は強いストレスによる気分・不安障害を伴っている可能性がある結果となった。Generalized Anxiety Disorder-7 (GAD-7) からは、対象学生の約16%が大きな不安感を抱えていることが見て取れる。また、約5%の学生は重度レベルの不安感を抱えている結果となった。

-
- 1) 北翔大学教育文化学部心理カウンセリング学科 2) 北海道教育大学旭川校教員養成課程
3) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科 4) 日本女子大学人間社会学部心理学科
5) 札幌学院大学心理学部臨床心理学科

キーワード：新型コロナウイルス 経済的状況の認知 遠隔授業の負担感、精神的健康、不安感、孤独感

I. 問題と目的

新型コロナウイルス感染拡大を受け、2020年3月12日に北海道で、同年4月7日には全国で緊急事態宣言が発令された。大学に対しては、2020年4月6日に文部科学省より「大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について（通知）」が発信され、ほぼすべての大学が手探りの状態で遠隔授業が導入された。

2020年4月20日から4月30日の期間に約35,000人の大学生対象に実施されたWeb調査(全国大学生活協同組合連合会広報調査部, 2020)における「現在の大学の授業の様子を教えてください」という項目では、「WEB(大学には出校せず受講)での授業を受けている」が18,382人(52.2%),「授業は行われていない」が16,161人(45.9%)という結果であった。また、「この先の「経済的な不安」を感じますか?」という項目では、「不安である」が13,267人(38.5%),「非常に不安である」が10,079人(29.2%)という結果であった。つまり、この時期には授業が行われていない大学が半数近くもあり、また経済的不安についても7割弱の学生が抱えていることが読み取れた。

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構国立情報学研究所(Nation Institute of Informatics,以降「Nii」と表記する)は、そのホームページ上に「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」と題し、2020年3月26日から12月25日現在まで23回ものサイバーシンポジウムを開催している。全国における緊急事態宣言が解除された5月25日以降のNiiのサイバーシ

ンポジウムでは、アンケート調査結果の報告も見られるようになり(例えば、植原2020, 松河2020, 野瀬・長沼2020, 串本2020, 丸山2020), 2020年6~7月における、学生や教職員が遠隔授業や大学生活についてどう捉えているのかなどの状況が少しずつ見えるようになってきた。

また、2020年6月頃の小学校・中学校・高等学校が順次再開されてきた時期には、大学生の想いを反映する事象として、「#大学生の日常も大事だ」というハッシュタグがTwitterで拡散されるようになってきた。同年7月にはある芸術系学科の大学生の「大学生は、いつまで我慢をすればいいのでしょうか。」というツイートで、4月から7月までの大学生活をマンガで描写している。そのマンガには「小中高も会社も再開してるのになんで大学は始まらないの?」「旅行には行ってもいいのに大学に行ってはいけないの?」「消えるのは授業日数と変わらない学費」など、在宅学習を強いられる一大学生の憤り、孤独感、虚しさなどが吐露されており、現在(2020年12月29日)までに約40万件的「いいね」がつき、約15万件のリツイートがされている。

2020年度の一年間、各大学が大学生の安全・安心と教育の質を保障するために、多くの議論を重ね、できる限りの努力や配慮をしてきたことが実情であろう。その中で、大学生への対応を考える上では、現在の大学生が置かれている現状を把握することに努め、学生たちの声に耳を傾け、正確に大学生の生活状況を把握することが重要ではないだろうか。特に、大きな環境的变化に対して長期的な適応を強いられているという点では、まず

大学生の心理的健康面について把握する必要がある。加えて、家計支持者の職務状況・雇用状況の変化や、学生自身のアルバイト機会の停止や減少など、社会経済的な困難が生じているケースは少なくない。遠隔授業などの学業環境の変化についての負担感と同時に、個人の経済状況の変化についての負担感も、把握する必要があるであろう。

全国において発令された緊急事態宣言が解除され、事態の長期化が明らかとなってきた2020年7～9月の時期に着目し、北海道内に在籍する大学生や短期大学生、大学院生を対象に経済的困り感や遠隔オンライン授業の負担感、そして心理的健康面などについて調査することを目的に本研究を実施した。

Ⅱ. 方法

1. 調査協力者と調査時期

北海道内の複数の大学に縁故法により依頼し、承諾の得た909名の大学生、短期大学生、大学院生を対象とした。平均年齢は19.9歳($SD=2.6$)であった。

調査時期は、2020年7月から9月であった。

2. 調査内容

調査はMicrosoft Formsによってweb上で行った。

内容については、以下の通りである。

1) 居住環境や経済状況についての項目

居住形態について、以下の5件法で尋ねた。「元々実家に住んでいる」、「一人暮らしをしていたが、新型コロナウイルスの影響で、今

は実家に住んでいる」、「今もアパートやマンションなどで一人暮らしをしている」、「シェアハウス、親せき宅などで家族以外の他人と暮らしている」、「その他」。

アルバイトの状況について、以下の4件法で尋ねた。「大学生になってからはアルバイトをしていない」、「大学生の時からしていたが、勤務時間が減らされている」、「大学生の時からしており、今もほぼ変わらず勤務している」、「その他」。

奨学金受給状況について、以下の4件法で尋ねた。「奨学金をもらっていない」、「大学生になって初めて奨学金をもらっている」、「高校生の時から奨学金をもらっていて、大学生になってからももらっている」、「その他」。

新型コロナウイルス発生前後の経済的困り感について、平井ら(2015)の主観的経済状態の指標を参考にして以下の5件法で尋ねた。「経済的にかなりゆとりがある」、「経済的にまあゆとりがある」、「経済的にゆとりはないが困ってはいない」、「経済的に困っている」、「経済的にかなり困っている」。

2) 講義の受講環境についての項目

現在の講義形態について、以下の5件法で尋ねた。「すべて遠隔授業」、「大半が遠隔授業」、「遠隔授業と対面授業が同じくらいの割合」、「大半が対面授業」、「すべて対面授業」。

1週間における遠隔授業の履修コマ数(1コマ90分)について、「1～4コマ」、「5～10コマ」、「11～15コマ」、「16～20コマ」、「21コマ以上」の5件法で尋ねた。

オンデマンド型授業¹及びライブ型授業²

¹ 教員が資料や動画等によって講義を行い、課題を提出するもので、リアルタイムには講義が行われないもの。

² 教員がZOOMやTeamsなどによって講義を行い、時間割通りに講義が行われるもの。

の1週間における遠隔授業の履修コマ数（1コマ90分）について、「1～4コマ」、「5～10コマ」、「11～15コマ」、「16～20コマ」、「21コマ以上」の5件法で尋ねた。

オンデマンド型授業及びライブ型授業の負担感について、「まったく負担ではない」、「あまり負担ではない」、「どちらともいえない」、「すこし負担である」、「とても負担である」の5件法で尋ねた。

3) 精神的健康についての項目

抑うつと不安を測定するためにKessler 6 scale 日本語版（川上ら, 2006）6項目（「まったくくない」から「いつも」の5件法）を用いた。全般的な不安を測定するためにGeneralized Anxiety Disorder-7日本語版（村松, 2014）7項目（「まったくくない」から「ほぼ毎日」の4件法）を用いた。孤独感を測定するためには孤独感尺度短縮版（Igarashi, 2019）3項目（「ほとんどない」から「よくある」の3件法）を用いた。その他の質問項目については、本報告では省略する。

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査対象者の属性

対象者の属性についてはTable1からTable 5に詳細を示した。女性、4年制大学生、専攻では教育学系学科の学生が多い傾向にあった。

Table 1 性別

	人数	%
女性	530	58.3%
男性	362	39.8%
その他(答えたくないなど)	15	1.7%
未回答	2	0.2%

Table 2 在籍課程

	人数	%
大学（4年制）	835	91.9%
短期大学	52	5.7%
大学院	20	2.2%
その他	1	0.1%
未回答	1	0.1%

Table 3 学年

	人数	%
1年生	297	32.7%
2年生	284	31.2%
3年生	199	21.9%
4年生	103	11.3%
過年度生(4年間で卒業していない学生)	8	0.9%
大学院生(修士課程、博士後期課程)	15	1.7%
上記以外(聴講生、科目履修生など)	2	0.2%
未回答	1	0.1%

Table 4 年齢

	人数	%
18歳	178	19.6%
19歳	263	28.9%
20歳	213	23.4%
21歳	127	14.0%
22歳	57	6.3%
23歳	18	2.0%
24歳以上	19	2.1%
未回答	34	3.7%

Table 5 所属学科

	人数	%
心理系学科	165	18.2%
教育学系学科	399	43.9%
スポーツ系学科	160	17.6%
福祉系学科	32	3.5%
芸術系学科	27	3.0%
法律系学科	2	0.2%
経済・経営・社会学系学科	13	1.4%
情報系学科	78	8.6%
医療・看護系学科	7	0.8%
文学・語学系学科	2	0.2%
工学系学科	2	0.2%
その他、上記以外	20	2.2%
未回答	2	0.2%

2. 居住形態について

居住形態は、Table 6 のとおりである。「一人暮らしをしていたが、新型コロナウイルスの影響で、今は実家に住んでいる。」が8.9%であった。調査時期が4～6月であれば、実家に避難等した割合がもう少し高かったと思われるが、7～9月時点でも1割弱が実家に戻っていることがわかった。また、「今もアパートやマンションなどで一人暮らしをしている。」が38.2%おり、アルバイト稼働や北海道及び札幌の新型コロナウイルスの状況などから実家に戻ることをためらう学生もいるのではないかと考えられる。

Table 6 居住形態

	人数	%
元々実家に住んでいる	432	47.5%
一人暮らしをしていたが、新型コロナウイルスの影響で、今は実家に住んでいる	81	8.9%
今もアパートやマンションなどで一人暮らしをしている	347	38.2%
シェアハウス、親せき宅などで家族以外の他人と暮らしている	19	2.0%
その他	29	3.2%
未回答	1	0.1%

3. アルバイトの状況

アルバイトの状況は、Table 7 のとおりである。「大学生の時からしていたが、勤務時間が減らされている」が23.0%であった。調査対象者の約4分の1がこの時期でのアルバイトの勤務時間を減らされていることがわかった。また「大学生の時からしており、今もほぼ変わらず勤務している」が34.9%いることから、この新型コロナウイルスの影響で慣れない遠隔授業の最中も全体の3割強の学生はアルバイトを継続している状況が見て取れた。

飯田（2019）は、大学生のアルバイト収入については、「3～4万円台」、「5～6万円台」がともに20%、「7～8万円台」が19%、「1～2万円台」が10%、「10～12万円台」が5%、「13万円以上」が2%であり、アルバイトが学生の経済状況の重要な支えとなっていることを示している。本調査果から半数強の学生がアルバイトに従事する中で、新型コロナウイルスによる収入減少は大学生活を営んでいく上で困難を伴うものであろう。

また、高本・古村（2018）は、大学生がアルバイトを行うことによって精神的健康と修学にどのような影響を受けるのかについて検討した結果、「心理的負荷のかかる出来事（職場での人間関係のトラブルやサポート源の消失）の方が深夜勤務よりも抑うつへのリスクが高い」と述べている。新型コロナウイルス感染拡大により、アルバイト業務も三密（密集・密接・密閉）状態の回避や消毒などの対応に迫られる上に、感染対策に対する意識のズレや、シフトや業務分担の調整困難など対人関係上の問題も多く生じると予測される。そうした中で、アルバイトに従事している学生の心理的負荷が懸念される。

Table 7 アルバイトの状況

	人数	%
大学生になってからはアルバイトをしていない	234	25.7%
大学生の時からしていたが、勤務時間が減らされている	209	23.0%
大学生の時からしており、今もほぼ変わらず勤務している	317	34.9%
その他	148	16.3%
未回答	1	0.1%

4. 奨学金受給状況

奨学金受給状況は、Table 8 のとおりである。「大学生になって初めて奨学金をもらっている」が51.5%、「高校生の時から奨学金をもらっていて、大学生になってからももらっている」が5.8%で、合計すると57.3%の学生が大学で奨学金を受給していることが分かった。また「奨学金をもらっていない」と答えた学生が40.8%いたことから、受給している学生としていない学生は、おおよそ半数程度に分かれていることが見て取れた。

吉中（2016）は、奨学金をめぐる問題として、「学費負担者の収入が減少しつつあるなかで、奨学金を借りて進学せざるを得ない状況になっている」こと、「少数ではあるが家計補助的に給付している実態」があることを指摘している。この結果から、道内の大学生の半数以上の学生が奨学金を受給している中で、今回の新型コロナウイルスに影響により保護者の収入が減少し、学生のアルバイト困難が進むようであれば、奨学金に依拠する学生は今後も増えていくことが考えられる。

Table 8 奨学金受給状況

	人数	%
奨学金をもらっていない	371	40.8%
大学生になって初めて奨学金をもらっている	468	51.5%
高校生の時から奨学金をもらっていて、大学生になってからももらっている	53	5.8%
その他	16	1.8%
未回答	1	0.1%

5. 新型コロナウイルス発生前後の経済状況の認知について

新型コロナウイルス発生前の経済状況の認知については、Table 9 のとおりである。

経済的困り群（「経済的にかなり困っている」「経済的に困っている」）は全体の9.4%であった。経済的ゆとり群（「経済的にかなりゆとりがある」「経済的にまあゆとりがある」）は全体の39.2%であった。経済的ゆとりなし・困りなし群（「経済的にゆとりはないが困ってはない」）は51.4%であった。

新型コロナウイルス発生後の経済状況の認知については、Table 10 のとおりである。

経済的困り群（「経済的にかなり困っている」「経済的に困っている」）は全体の25.5%であった。経済的ゆとり群（「経済的にかなりゆとりがある」「経済的にまあゆとりがある」）は全体の24.9%であった。経済的ゆとりなし・困りなし群（「経済的にゆとりはないが困ってはない」）は49.5%であった。

新型コロナウイルス発生前後を比較すると、経済的困り群（「経済的に困っている」「経済的にかなり困っている」）が2.7倍増加している。各項目について、「経済的にかなり困っている」を5点、「経済的にかなりゆとりがある」を1点として、新型コロナウイルス発生前と発生後の経済状況の認知に差があるかどうかについて対応のある t 検定を行ったところ有意な差が認められた（ $t=12.706$, $df=695$, $p<.001$ ）。この結果から、新型コロナウイルス発生前と発生後において、学生の経済状況については発生後のほうが「困っている」という認知が高くなっていることが示され、保護者の収入減少や学生のアルバイト収入減少などの背景があることが考えられる。

Table 9 新型コロナウイルス発生前の経済状況の認知

	人数	%
経済的にかなりゆとりがある	49	5.4%
経済的にまあゆとりがある	307	33.8%
経済的にゆとりはないが困ってはいない	467	51.4%
経済的に困っている	67	7.4%
経済的にかなり困っている	18	2.0%
未回答	1	0.2%

Table10 新型コロナウイルス発生後の経済状況の認知

	人数	%
経済的にかなりゆとりがある	34	3.7%
経済的にまあゆとりがある	193	21.2%
経済的にゆとりはないが困ってはいない	450	49.5%
経済的に困っている	179	19.7%
経済的にかなり困っている	53	5.8%

6. 現在の講義形態について

現在の講義形態については、Table 11のとおりである。「すべて遠隔授業」「大半が遠隔授業」を合わせると96.1%であった。調査時期の7月から9月までは、調査対象者の大学においてほぼ遠隔授業で講義が実施されていたことが見て取れた。

全国大学生活協同組合連合会広報調査部の報告（2020）では、対面（大学に出校して受講）での授業を受けていると回答している学生108人（0.3%）、WEB（大学には出校せず受講）での授業を受けているが18,382人（52.2%）、授業は行われていないと回答している学生が16,161人（45.9%）、その他が548人（1.6%）となっている（パーセンテージは筆者らが計算して追加）。4月の時点では4割強の学生が「授業が行われていない」と回答している点に関して、北海道内ではゴール

デンウィーク明けに講義が始まった大学が多いことからこの結果を裏付けるものと言える。

ちなみに、文部科学省によると「5月時点では、約9割の大学等が全面的に遠隔授業を実施していたが、7月1日時点では、約6割が対面・遠隔授業を併用して授業を実施。対面授業のみの大学等、遠隔授業のみの大学等は、いずれも約2割。」と報告している。

新型コロナウイルス発生前には対面授業が当然のように行われていたが、本調査時期は、北海道内のほぼすべての学生が遠隔授業による講義を受けていたことが示唆された。

Table11 現在の講義形態

	人数	%
すべて遠隔授業	571	62.8%
大半が遠隔授業	303	33.3%
遠隔授業と対面授業が同じくらいの割合	30	3.3%
大半が対面授業	4	0.4%
すべて対面授業	1	0.1%

7. 1週間における遠隔授業の履修コマ数について

1週間における遠隔授業の履修コマ数（1コマ90分）については、Table 12のとおりである。「16～20コマ」が16.2%、「21コマ以上」が5.1%であり、これらを合わせると、2割強の学生が、1日平均3コマの遠隔授業を履修していることがわかった。

本調査ではどのような機器で遠隔授業を受講していたのかは尋ねていなかったが、おそらく「パソコン」「タブレット」「スマートフォン」のいずれかが大半だと考えられる。スマートフォンのような小さな画面で1日3コマ（180分相当）受講する場合などでは視覚

的・身体的負担も大きいことが予想されるとともに、Wi-Fiの有無や速度など通信環境によっては落ち着いて受講できない場合も少なくないと考えられる。

Table12 1週間における遠隔授業の履修コマ数

	人数	%
1～4コマ	178	19.6%
5～10コマ	194	21.3%
11～15コマ	340	37.4%
16～20コマ	147	16.2%
21コマ以上	46	5.1%
未回答	4	0.4%

8. オンデマンド型授業の1週間の履修時間数について

1週間におけるオンデマンド型授業のコマ数については、Table 13のとおりである。「5～10コマ」が42.5%、「1～4コマ」が30.5%、「11～15コマ」が20.1%の順であった。

従来の対面型授業では、当然のことだが、大学の講義室で実際に授業を受ける形態であるが、新型コロナウイルスによる影響により、多くの授業が資料配布や動画配信などによって期日までに課題等を提出するやり方に変わったことが見て取れた。

Table13 1週間のオンデマンド型授業のコマ数

	人数	%
1～4コマ	277	30.5%
5～10コマ	386	42.5%
11～15コマ	183	20.1%
16～20コマ	47	5.2%
21コマ以上	10	1.1%
未回答	6	0.7%

9. ライブ型授業の1週間の履修時間数について

1週間におけるライブ型授業のコマ数については、Table 14のとおりである。「1～4コマ」が60.8%、「5～10コマ」が32.6%、「11～15コマ」が4.5%の順であった。

先述してきたようなオンデマンド型授業よりはコマ数が少ないものの、全体の9割強が「1～10コマ」の範囲内で、時間通り授業が行われていることが見て取れた。

Table14 1週間のライブ型授業のコマ数

	人数	%
1～4コマ	553	60.8%
5～10コマ	296	32.6%
11～15コマ	41	4.5%
16～20コマ	8	0.9%
21コマ以上	3	0.3%
未回答	9	1.0%

10. オンデマンド型授業の負担感について

1週間におけるオンデマンド型授業の負担感については、Table 15のとおりである。負担群（「とても負担である」「すこし負担である」）は52.4%、負担ではない群（「まったく負担ではない」「あまり負担ではない」）は32.8%となり、負担を感じる者から感じていない者まで、分布が広がっている傾向が見て取れた。

分布が広がっていることの背景については、遠隔授業における個別学習の親和性が関係していると考えられる。オンデマンド型授業は、提供した学習内容を学生がどの程度あるいはどのように理解しているかを課題等によって教員は把握する形式をとる。課題等の提出は出席確認も兼ねられて義務付けられて

いる場合が少ないが、提出期間や課題内容は授業によって異なる。それゆえに提出期限の管理を含めた個別学習に慣れている学生とそうではない学生によって、負担感が異なるのではないかと考えられる。

Table15 オンデマンド型授業の負担感

	人数	%
まったく負担ではない	92	10.1%
あまり負担ではない	206	22.7%
どちらともいえない	130	14.3%
すこし負担である	300	33.0%
とても負担である	176	19.4%
未回答	5	0.6%

11. ライブ型授業の負担感について

1 週間におけるライブ型授業の負担感については、Table 16のとおりである。負担群（「とても負担である」「すこし負担である」）は48.1%，負担ではない群（「まったく負担ではない」「あまり負担ではない」）は32.5%となり、オンデマンド型授業と同様に二峰化が見て取れた。

二峰化の背景については、インターネットに関する知識、デジタル機器操作の熟練度、自宅の通信環境などが関係していると考えられる。

インターネットに関する知識不足やデジタル機器操作に慣れていない場合は、なかなかZOOMやMicrosoft Teamsなどにアクセスできなかったり、スムーズに受講できなかったりすることから結果的に授業に思うように参加できず、だんだん授業に参加すること自体が億劫になるなど学習意欲が減じることで負担感が増えるのではないかと考えられる。

Table16 ライブ授業の負担感

	人数	%
まったく負担ではない	85	9.4%
あまり負担ではない	210	23.1%
どちらともいえない	172	18.9%
すこし負担である	317	34.9%
とても負担である	120	13.2%
未回答	5	0.6%

12. 心理尺度について

1) Kessler 6 scale (K6) について

川上ら（2006）によるカットオフ値として、気分・不安障害（陰性）が0～4点，気分・不安障害（軽度）が5～8点，気分・不安障害（中等度）が9～12点，気分・不安障害（重度）が13～24点に区分されている。

本調査結果からは、平均値が6.68 ($SD=5.93$)， α 係数は.90であった。また、川上ら（2006）の分類に従うと、本調査の対象者は、気分・不安障害（陰性）が410人（45.1%），気分・不安障害（軽度）が185人（20.3%），気分・不安障害（中等度）が159人（17.5%），気分・不安障害（重度）が156人（17.1%）となった。

対象学生の約55%の学生がストレスを抱え、そのうち約17%の学生は強いストレスによる気分・不安障害を伴っている可能性がある結果となった。単純比較はできないが、新入生の約37%がストレスを抱えていたという足立ら（2017）調査結果と比べると、ストレスを抱える学生の割合は高かった。

2) Generalized Anxiety Disorder-7 (GAD-7) について

本研究では村松（2014）にならい、0～4点はなし、5～9点は軽度、10～14点は中

等度, 15～21点は重度の症状レベルであると評価する。

平均値は4.76 ($SD=4.83$), α 係数は.90であった。また, 村松 (2014) の分類に従うと, 0～4 点は529人 (58.1%), 軽度の5～9 点は230人 (25.3%), 中程度の10～14点は101人 (11.1%), 重度の症状レベルの15～21点は49人 (5.4%) であった。

対象学生の約16%が大きな不安感を抱えていることが見て取れる。また, 15点以上の学生が約5%存在し, 新型コロナウイルス下で強い不安感を抱えていることが示唆された。

3) 孤独感について

平均値は4.72 ($SD=1.84$), α 係数は.86であった。

孤独感尺度短縮版の日本語版を作成した Igarashi (2018) の調査 ($n=1,020$) では, 平均値5.42 ($SD=1.72$) であった。Igarashi (2018) の対象者には, あらゆる階層や職種の人間であったものの, 本調査より孤独感の得点が高い。このことから, 必ずしも本対象者の孤独感が高いとはいえない結果であった。

IV. まとめと今後の展望

本研究は, 北海道内の大学生が新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が解除された2020年7月から9月までの時期を対象に, 経済状況の認知や遠隔授業の不安感, 精神健康面などについての調査を速報的に報告したものである。調査の結果としては, 新型コロナウイルス発生前と比べて発生後に経済的に困り感を持っている学生が増加しており, アルバイトに従事する学生の心理的負荷が懸念された。遠隔授業に対して負担感を感じずに適

応できている学生もいれば, そうでない学生も半数程度存在することも明らかとなった。複数の指標から精神的健康への影響が明らかになり, コロナ禍での精神的健康の悪化も示唆された。しかし, 本研究では遠隔授業の負担感の背景については明らかにはできなかった。今後は, 新型コロナウイルスによる影響による経済状況, 遠隔授業の負担感, 精神的健康など心理社会的変数とどのように相互作用するのかを明らかにしていくこととする。

本調査では, 追加調査の協力に同意した学生に対して第二波調査を予定している。今後この調査の詳細な分析についても, 順次, 別の論文や学会発表等で公表していくとともに, 今後も調査研究を続けていきたい。

文 献

1. 足立由美・水田一郎・工藤 喬・足立浩祥・金山大祐・福森亮雄・石金直美・竹中菜苗・稲月聡子・守山敏樹・瀧原圭子 (2017) 新入生健診におけるメンタルヘルスチェック尺度の年次比較－3年間の性別, 学部別分析－. CAMPUS HEALTH, 54 (2), 173－178.
2. 平井 美佳・神前 裕子・長谷川 麻衣・高橋 恵子 (2015) 乳幼児にとって必要な養育環境とは何か：市民の素朴信念. 発達心理学研究26巻1号56-69.
3. 飯田 昭人 (2019) 大学生生活と経済状況との関連についての研究(第1報)仕送り, アルバイト, 奨学金と自尊感情, レジリエンスに着目して 北翔大学生涯スポーツ学部紀要第10号161-172
4. 川上憲人, 近藤恭子, 堤 明純, 廣川空美, 岩田昇, 竹嶋 正 (2006)：うつ病・自殺

- 予防対策のためのスクリーニングツールとしてのK6/K10調査票の妥当性. 日本公衆衛生学会総会抄録集
5. 川上憲人, 近藤恭子, 柳田公佑, 古川壽亮 (2005) 成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究. 平成16年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究」分担研究報告書. 厚生労働省, <https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=200400766A> 【2020年12月1日参照】
 6. 串本 剛 (2020) 「東北大学における「全学オンライン授業アンケート(教員向け)」」 Nii主催 【第13回】 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム (7/31オンライン開催) https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200731-05_Kushimoto.pdf 【令和2年12月1日参照】
 7. 丸山 徹 (2020) 「新型コロナウイルスの感染拡大下での学生生活アンケートの調査結果」 Nii主催 【第13回】 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム (7/31オンライン開催) <https://www.youtube.com/watch?v=ec-V5R0wHXc&feature=youtu.be> 【2020年12月1日参照】
 8. 松河 秀哉 (2020) 「東北大学のオンライン授業に関するアンケートについて」 Nii主催 【第11回】 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム (6/26オンライン開催) https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200626-5_Matsukawa.pdf 【2020年12月1日参照】
 9. 文部科学省 (2020) 大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf 【2020年12月1日参照】
 10. 村松公美子 (2014) Patient Health Questionnaire (PHQ-9, PHQ-15) 日本語版および Generalized Anxiety Disorder -7 日本語版 - up to date -. 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究7巻35-39.
 11. 野瀬 健・長沼 祥太郎 (2020) 「九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート (春学期) について」 Nii主催 【第12回】 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム (7/10オンライン開催) https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200710-08_NoseNaganuma.pdf 【2020年12月1日参照】
 12. 高本 真寛・古村 健太郎 (2018) 大学生におけるアルバイト就労と精神的健康および修学との関連. 教育心理学研究66巻1号14-27.
 13. 徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 臨床心理情報学研究室 (山本哲也研究室) 新型コロナウイルス感染症拡大による生活変化が日本国民のメンタルヘルスに及ぼす影響 <https://www.catlab.info/covid-19?fbclid=IwAR2GBfOq92sFi5MiT3ZEddZwRhVVG1G1U7Uceo5CJY4xpb9vt6vFXK-XL-8> 【2020年12月1日参照】
 14. 太刀川弘和他 新型コロナウイルス感染症に関わるメンタルヘルスに関するアンケート調査. 筑波大学「知」活用プログラム

<https://plaza.umin.ac.jp/~dp2012/covid19survey.html?fbclid=IwAR1flcOm4au-8fox-6cneGL4fafswwxCPjbsOPMMuqtYINci11ftxFuvLA0#3> 【2020年12月1日参照】

15. 植原 啓介(2020)「慶應SFCにおける遠隔授業とアンケート調査結果」Nii主催 【第10回】 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム (6/5 オンライン開催) https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200605-5_Uehara.pdf 【2020年12月1日参照】
16. 吉中 李子 (2016) 奨学金制度の利用からみる大学生活の実態と課題：地方大学における学生アンケートからの考察. 名寄市立大学紀要第10巻47－58.
17. 全国大学生生活協同組合連合会広報調査部 (2020) 「緊急！大学生・院生向けアンケート」 大学生集計結果速報 https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/link_pdf02.pdf 【2020年12月1日参照】